

〔書評〕

高市恵之助・山田友二編訳

『中国旅行百科』(ナジェール版)を読む

戈 止 雄

やっと、旅行案内らしいガイドブックが出た。
読むだけで可なり面白い。

高市恵之助、山田友二両氏の編訳による「百科」(588頁)を一覧した。一昔前に流行したベデカの案内「チャイナ」、鉄道省編の「朝鮮・満洲支那案内」が役にたたなくなってから半世紀が流れた。

訳者のあと書きによれば、本書はスイスのナジェール社版(Nagel's Encyclopédie of Voyage. China, 1973)からの訳出であるが、全訳というわけではなく、日本人の訪中に役立つ選択的な訳出であり、且つ必要な最新資料の、日本で利用すべきものを加味した親切な編訳である。本文に加えて、挿入図版50、写真37葉があり、別包彩色地図(ナジェール社)8葉(北京3葉、天津・南京・上海・杭州・広州・桂林)が附けられている。

本書の構成は、はじめ30余頁が、新中国概説—その歴史と現在—巻末に「中国の旅」の一節において、訪中旅行の性格が、観光旅行と異なっていること、日本人の友好訪中旅行の発展情勢と、併せて反省すべき旅行心得を有益に解説している。

(一)

さて本文536頁の記述の特色は、中国の伝統文化・歴史的なものが、シノロジストの眼を通した背景をもって、新中国を案内してくれる。「ガイド」と言わず「エンサイクロペディ」と名づけたわけでもあろう。これを可能にしたのは、シノロジイ的教養をもつ、フランス訪中取材班が、毛主席・ドゴール友好関係の雰囲気によって、中国側から理解ある、豊富なデータ提供に恵まれた結果と思われる。読んで面白く、ダイナミックな新興都市像(大慶の如き)の政治・経済構造を把握させる点で、今日までの日本で編まれた案内記の物

足らなさを、補ってくれる。

(二)

文化史的百科の性格から、自然に北京のことが中心になる。本文536頁のうち250頁が、旧城内・城壁にそって、郊外・周辺部にわたって、豊富な図版をともなって解説されている。1920年代、私は、ここに住んだ外国人として、足跡を印した記憶と対照しつつ、今の姿を味うことは感慨深いものがある。

まず、東長安街が東にのびて、城壁を貫通するあたりに、北京新駅が、広い前庭をもって展開しているのに驚いた。そこから石景山製鋼所まで延びている有名な地下鉄も入口を開いている。20年代の私の逍遙路だった城壁上の観象台(元以来の天文台)は、今、建国門内大街にそって「北京古代天文儀陳列館」に納まり、近代天文館は新たに、西直門外に建てられた。旧観象台のあった所は、元の「大都」の東南角に位置していた。17世紀に入って、その台長は、蒙古人・回人から、欧人天主教宣教師に代り、マテオ・リッチ、アダム・シャル、フェルビーストによって、中国の天文観測がひき継がれた(128頁)。私の記憶では、これらヤソ会士たちの墳墓が、内城の西南隅「柵欄」(シャラ)上義師範学校の裏庭にあった。そこで宣教師たちが、うまく安いワインを醸造していた。この百科では「バスによって、北から南に向うと、阜成門の西南あたりに、チャラ(柵欄)の墓地だったところを通る。この墓地は、1610年に死んだマテオ・リッチの埋葬されて以来、北京イエズス会士たちが眠ったところである。しかし1900年の義和団の乱によって、破壊されてしまっていて、今は何も残っていない」としているが、上記

上義師範裏庭は、その改葬されたところであった
 だろうか。また「宣武門内の一隅の『南堂教会』を
 紹介して、リッチの墓があり、アダム・シャル
 の明末清初の難局対処を録している。その後幾世
 紀の変遷を経た今日、南堂は全国カトリック協会
 のもとで、人民中国に忠実でありローマ法王から
 は離れており、また、ミサはラテン語ではやらず、
 中国語の章句だという（135頁）。

旧観象台の内側は、旧貢院の空地であった。こ
 こは明朝の永楽帝の建設だが、1900年以来、科挙
 はなくなり、13年には建物も完廃されたが、広々
 とした官有地は空いていた。わが友、中江丑吉は、
 西側の片側町であった貢院西大街の寓居に、孤高
 の生活と研究の20数年を暮した。今そのあたりは、
 科学院に属する哲学・歴史・文学関係などいくつ
 かの研究所をもつビルが建っているという（120
 頁）感慨深いものがある。

(三)

次に、旧内城の西北角から、西城・西郊に移ろ
 う。

昔、西郊西山方面に出かける出発点は、西直門
 外であった。その頃唯一の交通機関、驢馬行のス
 テーションがあった。今や、ここは、天文館・首
 都体育館・北京展覧会場と並んで、動物園がある。
 この動物園は、三貝子花園（植物園時代に、日本
 人技師が、永く顧問であった）万牲園の時代を経
 て、パンダで名高い近代動物園になった。

昔、頤和園・玉泉山に行く道は、今の海淀路で
 あった。その沿道は、米国ミッションが経営する
 燕京大学キャンパスの外壁にそっていた。その大
 学は、1953年以来、内城馬神廟から移ってきた北
 京大学になっている。

北京大学は、われわれにも関連するところ浅く
 ないので、少し解説する。百科によれば「1898年
 （清朝末期）馬神廟跡に、京師大学堂が開設され
 た（日本から東大教授服部宇之吉等が教習として
 招かれた）。当時では珍しい赤煉瓦の洋風建築の

故に「紅樓」の名は、最高学府の象徴の如く喧伝
 されて、北京大学になった。1920年代、その図
 書館に李大釗教授を訪ねたことは、すでに何度も
 書いた。紅樓は、今なお残っており、毛主席と李
 大釗記念館も保存されているという。ただ、毛主
 席が二十八画生の名で書いた「体育の研究」を載
 せた『新青年』が、北大発行の雑誌となっている
 のは、軽卒なミスである。

1953年、北大は西郊の燕京大学のキャンパスに
 移った。この敷地は、18世紀末乾隆皇帝の寵臣、
 和坤の所領で、その邸の庭は頤和園のそれにまけ
 ん豪華なものであり1795年、初代イギリス大使
 ・マカートニーが、対清交渉をこの邸で行った。
 これを20世紀の初頭、アメリカミッションが買い
 とり、燕京大学を建設し、その最後の校長で、最
 後のアメリカ大使が、スチュアートであったこと
 は、まだ忘れられてはいない。私の記憶に誤なけ
 れば、日中戦争中、日本軍は、米人を逐いだして、
 一画を陸軍病院に使い、一廓を華北総合研究所（
 所長は退役将軍）に使用した。

この案内記は、北大におけるプロ文革の狼火に
 ついても、書きもらしていない。「百科」の名を
 つけた理由か。66年5月25日、若い7人の講師・
 教師による学長批判（エリート教育方針）の大字
 報を張りだした。毛主席の支持をえて、文革は燎
 原の火の如く、全国にひろがり、10年に及ぶ革命
 闘争のはじまりになったことが詳記されている。

余事ながら、日本人と北大についての挿話をい
 れる。解放後の北大には、日本人教師数名が在職
 した。その一人鈴木重歳君は、河上肇博士の女婿
 で、学生運動の闘士だった。敗戦後、東北から北
 京に入り、北大の日語教師に任ぜられ、30年間、
 よき毛沢東思想の学徒であり、日共の修正主義化
 に反対して戦い、在留日本人専門家たちのよきリ
 ーダーであった。不幸昨年7月、病にたおれたが、
 廖承志葬儀委員長のもとに公葬され、八宝山の革
 命烈士館に、その遺影が安置されている。日本人

として二人目（一人は岡田文吉氏）の栄誉をうけた。

北大の東西を走る海淀路や、昆明湖路をはじめ西北部郊外の諸路の両側は、文教区であり、大学・学院・研究所・博物館・美術工芸工場等が、森と寺観に交錯して、立ちならんでいる。天文台・天文館・清華大学・民族学院・民族音楽院・美術工芸工場等の標識が眼にとびこんでくる。

さらに西すれば、香山公園・八大処・頤和園・玉泉山・碧雲寺（耶律楚材の墓の所在地が、百科では頤和園内とされているが？）月壇・白雲觀・天寧寺等のリクリエーション区は、すべて曾遊の名勝地だが、よく解説されている。

奥西山の戒台寺・潭柘寺（共に馬鞍山中の古刹）は20年代に、中江・鈴江・阪谷等と一泊旅行を試みたところ、その山稜から、秋霞む北京城を眺めた思出は、生涯忘れられない情感をとまなう。日本敗戦の近づいた48年頃の西山は、完全に八路軍の制圧下であって、北京を占領していた日本人も近づくことなど思いも及ばなかった。

百科は、私にとって、目をみはらせる記事を録している。陶然亭公園と李大釗先生の因縁である。20年代の陶然亭は、日本人には殆ど知られていなかった、旧外城の東南隅の荒涼貧寒の沼沢地であった。一日ここに杖をひいた記憶によれば、一面芦荻におおわれて、湖の水面も見えず、静寂の中にヨシキリの声のみ喧しかった。私の再度の散策は、1958年の秋、解放後最初の訪中の折、S先生に誘われてであった（おそらく日本人で此処を訪ねた人はあるまい）。清潔になり、遊園の態を呈しており、解放前、日本人の最も多く住んでいた東城区のシンボル「東単牌楼」が、この地に移し残されていたことが印象的であった。丘上の亭に休憩し、傍の道観慈悲院は眼についたが、故事は語られなかった。この百科は、この慈悲院の一廊こそは、李大釗教授によるマルクス主義研究会その他の会合がしばしばもたれた所だという。20年代の北京を想起して、うたた会心の情を禁じえない。

（四）

東方の東直門・朝陽門外、更に通県に及ぶ東郊外区は、昔と面目を一新してしまった。坦々たる2重並木は木蔭のトンネルになって、大往還30キロに及び、北京空港と東直門を貫いて走っている。その沿線に、外人機関区の三里屯は、昔の交民巷の新姿といえよう。

新都市計画では、この東部と東南地区は、工業工場地帯に指定されている。初春から紅塵を運ぶ蒙古風は、西と北から吹いてくる。東部地区には、紡績工業、電球工業其他工場と工人団地が集中して、北京の生産面を示しているはずだが、本書はふれていない。ただ二つの古戦場を記している。一は八里橋で、1860年、英仏連合軍の北京侵寇戦のあったところ、フランス全権大使モントバンは「八里橋伯」の称号をもらった。他の一は過般の抗日戦争に於て、みごとな抗日地下道戦を戦った「焦莊戸」（順義県に近い）の農民たちである。なお八里橋は薊運河（大運河に天津にてつながる）の終点で、18世紀には、倉庫が河岸に櫛比して、北京市民数年分の食糧貯備をもっていた。今この町には、金代建築の13層の煉瓦塔が残っており、檐に釣られた2000余の小銅鈴が、今でも風にゆられて美しい音をひびかせている。

焦莊戸の地下道戦は映画化されたし、今盛んに、全国各地で「侵略」に備えて掘られている地下壕の先駆となった。

（五）

この百科に、有名な北京の地下壕は紹介されていないが、旅大市について、「全市にめぐらされた防空壕兼地下壕が、友好国の代表団に公開されだした。この地下道は全中国の『典型』といわれ、旅大市の機能を、そのまま地下に移すことができる大要塞でもある。」なぜ大連がかく典型的かという質問には「第二次大戦後も、しばらくソ連軍が駐在していただけに、中ソ対立が激化すればするほど、旅大には緊張が増すともいえよう」と。

ついでに、大連の工業の現状を紹介すれば、次の如くである。「棧橋の数は、普通12のままで、港湾労働の80%は機械化し、大連から日本に送られる石油は、専用の新バースから、新造5万トンの油送タンカーが横付けになる。新工業として大連製鋼所（中型）は、毎年600種類7000余の規格品を製出している。港湾管理局楼上から眺める大連工業は、造船・機械・紡績・化学工場・鉄道工場群が林立し、水産業も中国第一の生産額を誇っている。

東北は、中国工業化の策源地の一つであることは異論ないところ。鞍山（鞍鋼憲法も詳述）・撫順・沈陽・ハルピンの実況、最も詳細をきわめる紹介は大連で、7頁を費して、都市構造の「新事物」は何かを示している。その点では、農村公社の新事物を、大連において解説する（5頁）。

革命聖地記念個処見学のための延安・重慶（紅岩・曾家岩）南昌（八一公園・起義記念会）南京（梅花新村）広州（広州公社陵園農民講習所）長沙（第一師範学校岳麓山）桂林のほかに韶山が加えられている。地名考によれば、「韶」は伝説上の古楽器だという。丘陵と低地のある、平凡な湖南平原の典型部落。この部落には毛姓が多い。毛家の構えと間取り（図版あり）から、中農の上だという。スノーとの対談を引用して、生い立ちを

示し、「湖南農民運動視察報告」と、農民協会組織とを、1926～7年の毛主席のお国入りとを関連させて描いているところは心憎い。

但し、長い間鉄道敷設を許さなかったことと、韶山用水（華国鋒委員の推進）とがふれられていないことはさみしい。大連にならぶ、模範生産隊の「沙石峪」（河北省）の歩みも紹介されていることは、親切である。

シノロジイ的興味の都市、洛陽・西安・太原に加えて、安陽（殷墟）、鄭州（中原・河南省博物館）、周口店（北京原人）、観光風致都市の杭州・蘇州・無錫・青島・済南（泰山）のほかに、四川の成都と広西壮族自治区の桂林とが、精密に紹介されている。成都の北50キロの灌県の都江堰（灌県ダム）が紹介されているのに、桂林の隣興安県の靈渠（湘桂ダム）が紹介されていないのは片手落ちである。両者とも中国伝統技術の成就した世界的水利工事であるから。なお灌県の二王寺は、「二郎廟」が、現地名である。さらに望蜀の願をいえば、この二都市に関連して「長征」に一筆を与うべきではないか。長征ルートは、将来の学習観光の一大資源たることは、まちがいないのだから。

12月7日

（1月10日発行 筑摩書房 4,200円）

（20ページよりつづく）

まさにヒントンの個人史の上でも大きな転轍点であったといえる。

ふりかえってみれば、中国史の転轍点が別の意味で日本史の転轍点でもあった。日中15年戦争の

敗北後の30数年の軌跡をみる時、その敗北から何を汲取り、又切り捨ててきたものが何であったか、本書から読者は自己の体験に照して様々の読み取りができよう。（平凡社、1,800円）